

【原本】

長唄

あやめゆかた  
菖蒲浴衣

安政六年(1850)五月

作詞 不明

作曲 二代目 杵屋勝三郎 三代目 杵屋正次郎

五月雨や 傘につけたる小人形 晋子が吟も目のあたり

己が換名を市中の 四方の諸君へ売り弘む 拙き業を身に重き

かざり兜の面影映す 臯月の鏡曇りなき

椰の二葉のゆかしさは 今日なまの晴着に風薫る

菖蒲浴衣の白襲ね 表は縹はなだむらさき 紫に 裏むらさきの朱奪ふ

紅もまた重ぬるとかや

それは端午の辻が花 五つ所紋とこの陰日向 暑さにつくる雲の峯

散らして果は筑波根の 遠山夕ぐれ茂り枝を 脱いで着替への染浴衣

古代模様のよしながき 御所染め千弥 忍ぶ摺り 小太夫鹿の子 友禅の

おぼろに船の青すだれ 川風肌にしみじみと 汗に濡れたる枕紙(旧詞)

鬢びんのほつれを簪かんざしの 届かぬ愚痴も惚た同士

命と腕に堀切の 水に色ある 花あやめ

弾く三味線の糸柳 もつれを結ぶ盃の 行く末広の菖蒲酒しょうぶ

これ百薬の長なれや めぐる盃数々も 酌めや酌め酌め尽きしなきかずかず

酒の泉の芳村と 栄ふる家こそ目出度けれ

